

シードラちゃん、再び ベイルートマラソンへ

避難先のレバノンで 懸命に生きる子どもたち



昨年のマラソン大会でのシードラちゃん(右)
ベイルートマラソンは交通事故で走れなくなったマラソン走者のメイ・カリルさん(後列中央の女性)が宗教間の融和を図って作り上げた。ブルジバラジネキャンプの子どもたちとの記念撮影。

シリアからレバノンに逃れてきた少女シードラちゃん(98号で紹介)のその後をお伝えします。

2013年5月に、シリアのセットゼイナブというパレスチナ難民キャンプから、お母さんとおばあさん、おばさんと共にレバノンのブルジシェマリ難民キャンプに避難してきたシードラちゃん。シリアで受けた爆撃によって全身を負傷し手の指が折れ曲がったままで、膝の骨が折れてリハビリが必要な状態でした。当会とUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の支援で指の手術を受けた後、手と足のリハビリに週2回ずつ病院に通い続けました。

2013年の11月には、中東最大の国際マラソン大会であるベイルートマラソンがあり、シードラちゃんもお母さんと一緒に1キロコースに参

加。コースを歩くだらうという私たちの予想を覆し、足を引きずりながら必死で走り、お母さんも追いつかないスピードでしっかりと完走しました。

その後病院で50回ものリハビリを無事終了して足も手もかなり動くようになり、友達と一緒に走ったりもできるようになりました。UNRWAの学校に通って友達もできました。キャンプ内にある「子どもの家」センターのワークショップや、学童クラブにも通い続けています。こうしてレバノンでのキャンプ生活に次第に慣れ親しんできたシードラちゃん一家でしたが、大きな問題が起きました。

「住むところがない！」

レバノンに落ち着いた時から、シ

ードラちゃんの一家は台所もトイレやシャワーもない一部屋に住んでいました。国連の支援があり一年限りということで無料で住むことができました。しかし一年後、大家から別の人に家を有料で貸したいので出て行ってほしいと言われ、急に家探しをしなければならないことになりました。

お母さんは、必死でキャンプ中を尋ねて歩き回りましたが、空きが全くないのです。「子どもの家」のソーシャルワーカーも協力して一緒に探し回った結果、ようやく一室が見つかりました。ところがそこは天井にアスベストが入っているものでした。日当たりも悪く、その部屋しかキャンプ中で空いているところはありませんでした。私たちも心配して何かできる手立てはないかと考えまし

たが、キャンプ内には本当に空きがなく、ひどい条件の家でも月200ドルとか300ドルの値段で取引されているのが現状です。

当会で家賃を補助することにして、一家は今年7月にそのアスベストの入った部屋に入居しました。ところが入居後二週間もたたないうちに、大家から「親戚に貸したいので、出て行ってほしい」と言われたのです。そんな悪条件の家ですら、借りたという人が大勢いて、一家は再び家探しに奔走することになりました。おまけにどんな家でも見つけてすぐに契約しない限り、すぐ他の人の手にわたってしまうのです。その後なんとか別の家を見つけて入居しましたが、その家もまた大家にすぐに出ていくように言われてしまいました。アラブ社会では女性世帯はとも肩身が狭く、大家に強く言われると別のところに移っていかざるを得ないのも悲しい現実です。

それでもお母さんのアーイダさんは必死でキャンプ内を探し回り、幸運にも新しく改装されたばかりだという家を見つけることができました。建物の4階で上り下りは高齢のおばあさんにとっては大変ですが、窓からは遠くに海を見渡すことができ、小さいけれども清潔なシャワーと台所がついています。家探し騒動で3か月もの間苦労した結果、一家はきちんとした住まいに入居することができたのです。

「ベイルートマラソンに参加したい！」

ようやく落ち着いたシードラちゃん一家を、9月末に訪問しました。お母さんとおばあさんが迎えてくれました。「家探しは本当に大変だったけど、こんな清潔な家に住めて本当に嬉しい」と、お母さんは言っていました。すると外からシードラちゃん

んが駆け込んできました。UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の学校から帰ってきたのです。シードラちゃんの行方不明のお父さんはシリア人ですが、お母さんがパレスチナ人なので、シードラちゃんはUNRWAの学校に通うことができます。「学校はとっても楽しい」とはにかんで答えるシードラちゃん。身長も伸びて、部屋の中を生き生きと走り回る様子を見ていると、1年3か月前に、小さくおびえていた姿を思い返して感慨深いものがありました。

シードラちゃんが部屋からアルバムを持ってきました。そこにはシードラちゃんが幼い時から毎年写真館で撮った写真が納められていました。毎年「犠牲祭」(イスラム教の巡礼月の終わりのお祝いで、日本のお正月に近い)の前に、両親がシリアの写真館に連れて行っては記念撮影をしてくれていたのだそうです。戦災によってここ数年はそれもできませんでした。でも今年10月の犠牲祭の前に、新しい服を一枚買って髪にはリボン結び、キャンプに生えている木の下で写真撮影したのです。お母さんの精一杯の心尽くしです。さ

らに、去年のベイルートマラソンに参加した時の写真も見せてくれました。



「今年もベイルートマラソンに参加してみる？」と聞くと、すぐに「参加したい！」と元気な声が帰ってきました。なんと、おばあさんも一緒にベイルートに行きたいと言うのです。去年は、誘ってもそんなところへは行かないと言っていました。行方不明になった息子であるシードラちゃんの父親のことを思っては泣くことの多いおばあさんでしたが、今年ベイルートまで行きたいというおばあさんの勇気に感心しました。

「現実を受け入れる」

お母さんは今年の3月に行方不明の夫を探すため、一人でシリアへ向

シリア難民の状況

シリア内戦では1,000万人が支援を必要としている

320万人が国外に逃れた
うち110万人がレバノンに

そのうち38万人以上が学齢期の子どもたち
25万人以上が心理サポートを必要としている

シリア難民の大規模流入で、レバノン経済はますます困難になっている

5.5万人以上のパレスチナ人が再難民となってシリアからレバノンの難民キャンプに流入している

レバノンは物価が高く、パレスチナキャンプは劣悪で、シリアからのパレスチナ人は生活に苦しんでいる

レバノンではパレスチナ難民に厳しい制限がかけられているシリアから来た人々の多くがビザの更新ができずに不法滞在となり、シリアに強制送還される人も多い



かいました。しかしそこで見たのは、残骸となった家の数々だけでした。彼女は方々を尋ね歩き夫の消息を探りましたが、手掛かりは何も得られずレバノンに戻ってきました。夫は行方不明のまま、収入は国連からの少しの支援のみ。娘は指を一本失い、レバノンの難民キャンプでの暮らしを余儀なくされている。でもお母さんもおばあさんもずっとたくましくなりました。つらい現実を受け入れ、さらにその中で少しでも楽しみを見つけ、日々感謝して生き抜いていこうとしているのです。女性家族がしっかりと団結して、立ち向かっていこうとしているのです。

「ぼくもベイルートマラソンに参加する！」

お父さんを失ったり悲しい思いをしてきたのは、シードラちゃんだけではありません。首都ベイルートにあるブルジバラジネ難民キャンプにも、様々な過酷な思いを体験してき

た子どもたちがいます。そんな子どもたちを対象に、1年前から心理サポートのワークショップを続けてきました。子どもたちはつらい思い、悲しい思いを分かち合い、共に泣き共に笑って成長してきました。子どもたちの一部はレバノンの生活に耐えられずシリアに戻り、一部は第三国に移住しました。家計を助けて働かなければならずやめてしまった子どももいます。それでも多くの子どもたちが現在も「子どもの家」センターに通い続けています。学童クラブでは、英語・算数・アラビア語を学習し、力を確実に培ってきました。

ブルジバラジネの子どもたちに、シードラちゃんたちが参加した去年のベイルートマラソンの映像を見てもらいました。すると父親をシリアでの爆撃で失ったマラックちゃんが、「シードラちゃんたちはとても勇敢だわ」と言いました。父親を失い、笑うことすら拒んでいたマラックちゃんですが、ずっと学童クラブとワー

クショップに通い続け、今ではゲームにも進んで参加して、とても楽しそうな笑顔を見せるようになりました。彼女だって勇敢なのです。

ワークショップに通ってきている子どもたちは、日々困難に直面しています。「シリアから来た子は汚い」などと言われたり殴られることもあります。収入がなくどうやって暮らしていけばいいのかと嘆く親の姿も見ています。シリア人の子どもたちの場合は、未だに学校にも通えません。UNHCRと提携しているレバノンの公立学校に登録はしたものの、登録者が多すぎていまだに開校されていないのです。そんな子どもたちも今年、シードラちゃんたちに続いてベイルートマラソンに参加することになりました。

「同じパレスチナ人だけど」

さて今年のマラソンには、シリアから来た難民の子どもだけではなく地元のパレスチナ人の子どもたち





も招待します。シリアから来た子どもたちと地元生まれの子どもたちは、同じパレスチナ人なのに軋轢があり普段はなかなか交じり合いません。双方の子どもたちを集めてボールを使った名前あてゲームをしました。シリア難民の子はシリア難民の子にしかボールを渡さないし、そのうち地元の子が投げたボールが窓の外に飛んでいってしまってどうにもうまくいきませんでした。

そこで日本から持ってきた折紙を使って、アートワークをすることにしました。折紙を縦に細く切って、違う色の折紙と輪にしてつなげていきます。七夕の輪飾りの要領です。3つのグループに分かれて、子どもたちがまんべんなく混じるようにしました。そして一番長く、美しく輪を作り上げたチームを勝ちとする競争をしました。必ず違う色を隣に持つことが条件です。すると皆一生懸命に集中して、気づかないうちに隣り合った子どもたちどうし、シリ

ア生まれもレバノン生まれも関係なく、一緒に協力して輪をつないでいくのです。短時間であったのに、とても長い長い輪を作り上げることができました。短くても長くても、それぞれの輪が協力しあった結果なのでとても美しく見えました。

「レバノンでの暮らし」

シリアから来て2、3年になる子どもたちもいます。前述のマラックちゃんは、センターに最初に来た時は、「レバノンに来て、私の人生は醜く退屈なものになった。お父さんと一緒に、シリアの家で死んでしまえばよかった。レバノンで新しい家を借りたけどシリアのおうちとは違う。学校にも行っているけれど、友達なんていない。」という詩を書き、他の子どもたちもレバノンなんて嫌い、この暮らしなんて大嫌いと思っていました。

最近「日常の中にある楽しみを見つけよう」というテーマで「犠牲祭」

の寸劇をしました。子どもたちは、犠牲祭の時には内戦で人が殺され嘆き悲しむばかりだったシリアの女性たちを演じ、場面を転じて、次はレバノンで犠牲祭に皆が集まってご馳走を食べ囲らんする女性たちを演じました。以前はシリアが良くレバノンはつらいという対比だったのに、今回シリアは悲しくレバノンは楽しいというイメージでした。あれほど嫌悪していたレバノンなのに、ここでの生活を何とか受け入れ始めている子どもたちの気持ち、努力が感じられました。子どもたちは、好きでレバノンに住んでいるのではありません。でもシリアの家も住んでいた町も崩壊してしまった今、せめてレバノンにいる間はここでの生活を受け入れて、肯定していくしかないのです。ワークショップに参加しながら、多くの困難を乗り越えて成長してきた子どもたちの姿がそこにはありました。



当会の シリア避難民支援の 概要

- 2012年はヨルダンで、2013年からはレバノンでのシリア難民支援を継続中。
- パレスチナ難民キャンプと、その周辺に流入してきたパレスチナ人とシリア人の避難民を支援。

- 女性世帯と子どもたちへの物資配布とセーフティネットの形成(2013年、約1500世帯)、子どもたちの幼稚園や学童への受け入れや給食(2013年～継続中。2013年は約4000人)。歯科、婦人科、精神科と心理サポートの提供(2013年～継続中。2013年は1万人以上)。女性の心理サポート(2013年から継続中。2013年は700人以上)